

紀要

■『紀要』刊行30周年記念号

30

- 縄文時代初頭の移動とルートについて 重田 勉 (1)
- 近江地域のカマド形土器
—渡来系集団の動向把握にむけて— 辻川 哲朗 (6)
- 出土文字資料に近江古代史を求めて
—付表「滋賀県下の発掘調査で検出した地震跡」— 濱 修 (18)
- 正倉院文書に見える三雲寺の所在地について 小松 葉子 (26)
- 奈良時代の地域開発と神社本殿
—蒲生野・金貝遺跡の調査成果から— 中村 智孝 (39)
- 近江における瓦器の基礎的研究 堀 真人 (50)
- 安土城の空間特性 —安土城は神社だ— 大沼 芳幸 (67)
- 高島郡における山城の築城画期 小林 裕季 (75)
- 将棋史研究ノート8 —歩兵の存在感— 三宅 弘 (84)
- 研究ノート 近代化の痕跡
—彦根市松原内湖遺跡の鉄道遺構・遺物— 小島 孝修 (89)
- 琵琶湖地域における人と森の相互関係史の解明に向けて
—滋賀県の遺跡における古生態学データの集成— 林 龍馬・佐々木 尚子・瀬口 真司 (97)

近江地域のカマド形土器 —渡来系集団の動向把握にむけて—

辻川 哲朗

1. はじめに

近江の渡来系集団にかんする諸論説 古代の近江地域に渡来系集団が居住していたことは、はやくから文献史料によってうかがわれていた。しかし、この点を具体的に描きだしたのは、当時滋賀県教育委員会文化財保護課の若き技師一水野正好氏であった。

水野氏は、滋賀郡北部（現在の大津市中部）に展開する大規模な後期群集墳—志賀古墳群⁽¹⁾を対象として検討をくわえた結果、その古墳群が以下のような特徴を有する点をあきらかにした（水野1969）。

- ①平面形態が長方形・断面形態が平天井構造を呈する「畿内」地域通有の石室とことなり、石室形態が平面方形で、穹窿頂持ち送り構造（ドーム状）を呈する。
- ②石室内からは、渡来系文物であるミニチュア炊飯具（カマ・ナベ・コシキ・カマド）がしばしば出土する。
- ③文献史料には、古墳群が所在する志賀郡大友郷・錦部郷を中心とし、渡来系氏族の居住が判明する。

以上から、水野氏は、志賀古墳群が古墳時代後期における渡来系集団—「志賀漢人」の墓域であり、その周辺に渡来系集団が居住していたと解釈した。水野氏の研究成果は、考古資料と文献史料を駆使し、渡来系集団の居住をあきらかにした点で画期的なものであった。

その後、志賀古墳群での調査がすすみ、上記①・②をしめす資料が増加するとともに、周辺の集落遺跡における発掘調査が進展した結果、大壁建物やオンドル状遺構といった、韓半島に系譜をもつと目される住居関連遺構が検出され、水野氏の見解は集落面からも裏づけられることになった（花田1993・2000、大橋1995等）。

水野氏は「（引用者註：志賀漢人である）穴太・大友・錦織氏は、多くの姓に分かれ、滋賀郡内にとどまらず、郡外・国外に分枝しており、内にはこの滋賀郡の本貫に帰葬した場合も考えられるところから、一層の核古墳群の形成がなされたのであろう」（水野1969、p90）とするように、渡来系集団の居住が大津中部に限定されず、志賀郡外あるいは近江国外にも居住しており、かれらが本貫地にあたる志賀古墳群に帰葬した結果、1000基に達する大規模な「核古墳群」の形成されたとかんがえていた。

一方、志賀古墳群を構成する個別古墳群の立地に着目し、その様相から尾根斜面の一定範囲内に集中して分布する密集型墓域というべき類型と、扇状地上の比較的ひろい範囲に散在的に展開する墓域の類型を区別し、後者の造営集団として在地集団を、前者の造営集団として帰葬者集団を想

定する見解もしめされた（大崎1988）。花田勝広氏も水野氏の指摘をうけて、「比叡山東麓の狭い扇状地に六〇〇基からなる横穴式石室の被葬者集団全ての集住を求めるることは無理があり、やはり他地域からの本拠地への帰葬を求めることが可能」（花田1993、p88）とした。ただ、これらの諸説では、志賀古墳群へ帰葬した集団の居住地が具体的にしめされたわけではなかった。

この点について、より具体的に志賀古墳群の造営集団である渡来系集団—志賀漢人が大津中部地域を本拠として居住するとともに、かれらと本貫を共有する集団が近江各地へ進出・居住していたことを、新出の木簡資料をふくむ文献史料を駆使して提示したのが大橋信弥氏である（大橋1995）。大橋氏の検討結果は以下の諸点にまとめられる。

- ①志賀漢人系渡来系氏族の居住は、志賀郡のみならず、栗太郡・野洲郡・蒲生郡・神崎郡・愛知郡・犬上郡・坂田郡・浅井郡・高島郡といった諸郡で確認でき、なかには郡領氏族級の地位をえている。
- ②かれらは湖辺部—とくに湖上交通の拠点である港湾施設隣接地点に分布することがおおく、水上交通拠点である志賀津に拠点をおき、近江各地の港湾で湖上交通に関与したと推定できる。
- ④近江各地への進出時期は確実に8世紀前半以前で、各地の古代寺院の創建や大壁建物の時期等から6世紀後半から7世紀前半頃に推定した。

課題の抽出 このように、近江各地への渡来系集団の居住については、水野氏によって想定され、大橋氏によって詳細に文献史料から検討がすすめられてきた。とくに、大橋氏は、7世紀以降の文献史料により近江各郡における志賀漢人の居住を具体的にあきらかにし、その進出時期を氏寺と目される古代寺院の創建時期や大壁建物といった考古資料も参照しつつ、6世紀後半から7世紀前半頃に遡上する可能性を指摘した。本稿では、この点について検討した結果、大橋氏が推定した近江各地への進出時期について、別の考古資料—カマド形土器からいま少し裏づけをくわえられるのではないかとかんがえるにいたった。その理由を以下にのべておきたい。

【ミニチュア炊飯具研究の問題】志賀古墳群出土ミニチュア炊飯具については、すでに松浦俊和氏（松浦1984）を端緒として、先学による研究成果が提示されている（花田1993、吉水2008等）。そして、これらは編年的な観点からの検討を中心とするものであった。

ただし、いうまでもなく、ミニチュア炊飯具はなんらかの実用品をモデルとしてミニチュア化されたもの—实用性

を喪失した「仮器」である。そこでは祖型のイメージが表現されればよいのであって、「炊飯」の可否は問題でない。志賀古墳群出土ミニチュア炊飯具のなかには、カマドとカマを一括成形したものや、はては未焼成品までが見いだされる。実用的な機能をはたす必要がないと、祖型からの逸脱は一举に加速しうることがわかる。さらに、未焼成品の存在は、その製作が土器製作集団の手によるばかりではなく、土器製作に従事していない人々が必要にせまられて製作し、「かたち」ばかりを表現した可能性も示唆する。ここからも、ミニチュア炊飯具製作をめぐる状況は多様であつたことが予想される。この点を考慮すれば、ミニチュア炊飯具が一定の方向で変化したという前提すらあやうくなるから、ミニチュア炊飯具の編年は、製作者を見えた系統的把握なしには、困難な作業となるだろう。

【実用品とミニチュアとの比較】本稿では視点をかえて、ミニチュアカマド形土器とその祖型たる実用品との対応関係に、以下の理由から着目することにした。

まず、ミニチュアカマド形土器の使用者は、その祖型たる実用品を使用していたとかんがえるのが自然であろう。これを前提とすると、祖型からの変容度合は諸条件によってさまざまに表出することが予想されるものの、祖型を推定できれば、祖型たる実用品とミニチュア品との対応関係をさぐることで、志賀古墳群の造営集団と共にカマド形土器を使用していた集団の居住場所を推測できるとかんがえる。さらに、そうした集団=志賀古墳群造営集団とは確言できないけれども、その一部が志賀古墳群の造営集団であった可能性は十分にあるともかんがえる。

しかし、従来のミニチュア炊飯具研究は、いずれもミニチュア製品のみを対象としており、実用品との関係については、ほとんど論じられていない。実用品にたいする検討も、稻田孝司氏による先駆的な業績（稻田1978）以降、近江地域では基礎的な集成作業すら実施されてこなかった。

検討の方法 以上のような問題意識にたち、本稿ではつぎのように論をすすめる。まず、志賀古墳群を特徴づけるミニチュア炊飯具のなかからミニチュアカマド形土器の様相を確認する（2章）。つぎに、ミニチュアの祖型と目される実用品—墳墓以外の集落等の遺跡から出土したカマド形土器について、近江地域内の出土事例を検索し、形態分類したうえで、分布を分類別・時期別に整理する（3章）。それをうけて、両者の対応関係から志賀古墳群の造営集団の展開について検討する（4章）。

2. 志賀古墳群出土カマド形土器の検討（図1・表1）

事例検索 志賀古墳群から出土したミニチュア炊飯具については、近年吉水真彦氏によって網羅的な集成がなされ、そのなかでカマド形土器もあつかわれている。その結果、現在のところ12遺跡54点の出土事例が確認されている（吉水2010・2011）。今回はこの吉水氏の集成に依拠する。な

お、そのほぼすべてが実用性を喪失したミニチュア土器であるものの、大通寺C-1号墳（表1-12-1）等は、法量から実用品としての機能をはたしていた可能性をのこす。

形態分類（図1） 志賀古墳群から出土したミニチュアカマド形土器にたいしては、カマド形土器を底の形状を中心に分類した稻田氏による分類案（稻田1978）が有効とかんがえる。それによつたうえで、外面突帯（有：1類、無：2類）・把手の有無と屈曲方向（上向き：A類、横向き：B類、下向き：C類、なし：D類）・排煙孔の有無・脚の有無・内面突帯の有無によって以下のように分類した⁽²⁾。

【付底型】 焚口外縁に粘土を貼りたして底としたもの。基本的に脚はなく、排煙孔もないものが大半をしめる。属性の組みあわせから、付1A類・付1B類・付1D類・付2A類・付2C類・付2D類に分類した。なお、付底型にともなうカマは、羽釜1例をのぞき、すべて「く」字状口縁をなす。

【曲底型】 焚口を切除するさいに焚口上端の粘土を上方へ折りまげて底としたもの。4例が確認される。基本的に排煙孔をもたない。外面突帯の有無（有：1類、無：2類）によって、曲1類と曲2類とに大別する。4例のうち、曲1類は1例、曲2類は3例ある。曲2類には、把手をもたない2例（曲2D類）と、下向き把手をもつ1例（曲2C類）がある。2C類には内面突帯・脚を、2D類には脚を有する例がある。また、曲底型4例のうち、2例が羽釜をともなう。

【無底型】 明確な底をもたないもの。6例あり、いずれも外面突帯・脚をもたない。排煙孔は基本的にもたないものの、1例のみ確認される。把手の有無により、無2B類・無2D類に分類した。

出現比率 以上の3大別分類をふまえて、出土事例をみてみると、総計54点のうち、付底型は44点、曲底型は4点、無底型は6点であり、全体にしめる割合はそれぞれ81%・8%・11%となる。以上から、付底型が圧倒的に卓越する点はあきらかである。

時期 類型ごとに確認する。付底型はTK10型式からTK209型式までは継続する。曲底型はMT15型式からTK43型式まではつづくようである。無底型はTK10型式から出現し、TK209型式までは存続する。つまり、各類型は、各時期をとおして、おおむね併用されていることになる。

3. 集落遺跡出土のカマド形土器の検討（図2・表2）

事例検索 今回、滋賀県下の調査報告書を検索し、志賀古墳群以外の集落等の遺跡から出土したカマド形土器を対象に事例検索し、報告された破片点数レベルで集成をおこなった。若干の遺漏事例が存在する可能性をのこすものの、この作業によって全体の傾向を把握できたとかんがえる。

形態分類 出土事例の大半が破片資料であった。そのため、詳細な分類は困難であると判断し、ここでは稻田氏による底の形態にもとづく分類（稻田1978）に依拠して、付底型と曲底型に区分するにとどめた。ただ、出土事例のなかに

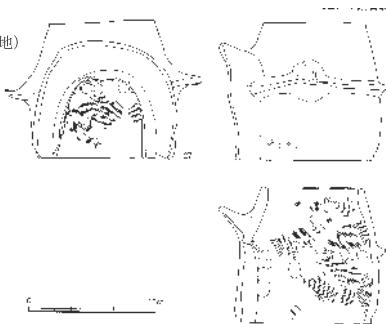
付1A類

太鼓塚20号墳



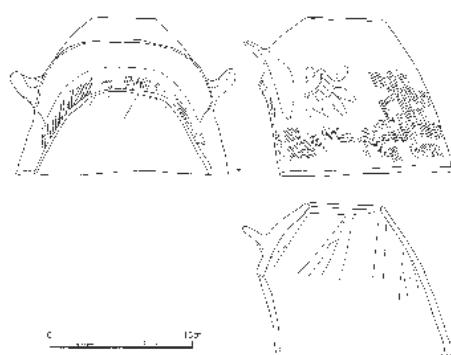
付1B類

穴太廐寺（伊藤氏所有地）



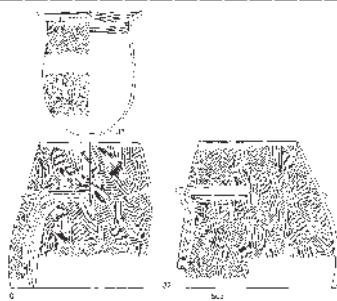
付2A類

穴太野添10号墳



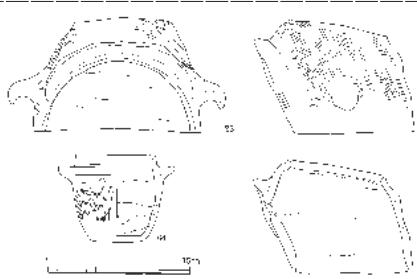
付1D類

大通寺C-2号墳



付2C類

太鼓塚C-6号墳



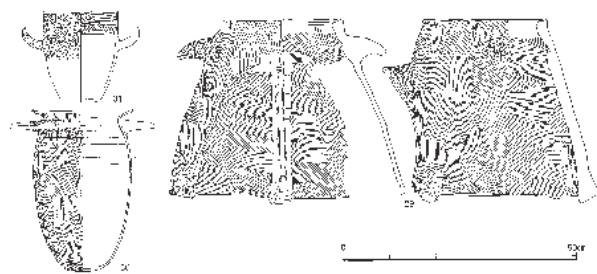
付2D類

福王子2号墳



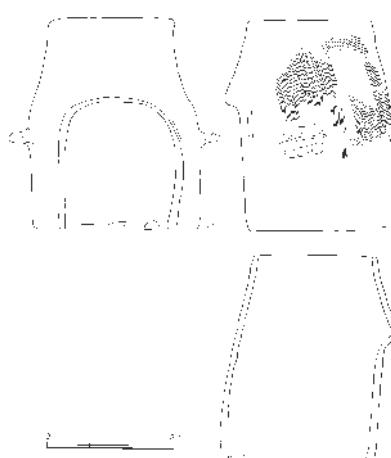
曲2C類

大通寺C-1号墳



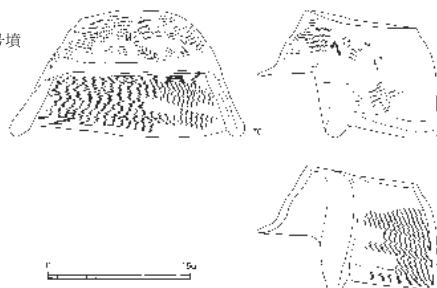
無2B類

太鼓塚15号墳



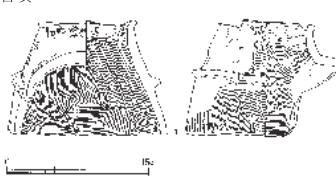
曲2D類

太鼓塚B2号墳



曲1D類

嶽古墳



無2D類

穴太飼込15号墳



*図版典拠文献は表1による。

*縮尺は大通寺C-1・C-2号墳は任意縮尺、それ以外は1/8。

図1 志賀古墳群出土ミニチュアカマド形土器の諸類型

表1 志賀古墳群出土ミニチュアカマド形土器一覧

番号	遺跡名	所在地	遺構名	カマド形土器の属性と分類							伴出するミニチュア煮炊具			時期	
				底	外面 突帯	把手	排煙 孔	内面 突帯	脚	分類	カマA	カマB (羽釜)	ナベ	コシキ	
1	1 嶽古墳	大津市坂本8丁目	嶽古墳	曲	有	無	無	無	無	曲1D			1		TK43
2	1 袋古墳群	大津市坂本6丁目	袋2号墳	付	無	無	一	無	無	付2D			1		TK43
	2 袋古墳群	大津市坂本6丁目	袋2号墳	付	—	—	—	—	—	付—			1		
3	1 穴太野添古墳群	大津市坂本1丁目他	10号墳	付	無	上	無	無	無	付2A	1		1	1	
	2 穴太野添古墳群	大津市坂本1丁目他	18号墳	付	無	下	無	無	無	付2C	1		1	1	
	3 穴太野添古墳群	大津市坂本1丁目他	20号墳	付	無	上	無	無	無	付2A	1		1	1	
	4 穴太野添古墳群	大津市坂本1丁目他	24号墳	付	無	無	無	無	無	付2C			1		
4	1 穴太銅込古墳群	大津市穴太2丁目他	1号墳	付	無	上	—	無	無	付2A					TK10～TK43
	2 穴太銅込古墳群	大津市穴太2丁目他	3号墳	曲	—	下	—	—	—	曲-C		1	2		TK10
	3 穴太銅込古墳群	大津市穴太2丁目他	4号墳	付	無	無	無	無	無	付2D	1		1		TK209
	4 穴太銅込古墳群	大津市穴太2丁目他	5号墳	付	無	上	有	無	無	付2A	1		1		TK10～TK43
	5 穴太銅込古墳群	大津市穴太2丁目他	10号墳	付	有	上	無	無	無	付1A	1				TK209
	6 穴太銅込古墳群	大津市穴太2丁目他	11号墳	付	無	無	無	無	無	付2C			1		TK209
	7 穴太銅込古墳群	大津市穴太2丁目他	11号墳	付	無	下	無	無	有	付2D					TK209
	8 穴太銅込古墳群	大津市穴太2丁目他	13号墳	付	無	無	無	無	有	付2D	1		1	1	TK10～TK43
	9 穴太銅込古墳群	大津市穴太2丁目他	15号墳	無	無	無	無	無	無	無2D		1	1	1	TK10～TK43
	10 穴太銅込古墳群	大津市穴太2丁目他	大道口	付	無	無	有	無	無	付2D					TK209
5	1 穴太遺跡	大津市穴太1丁目他	伊藤氏所有地	付	有	横	無	無	無	付1B					TK209
6	1 大谷古墳群	大津市滋賀里町乙	3号墳	無	無	無	有	無	無	無2D					TK10
7	1 小山古墳群	大津市滋賀里2丁目	4号墳	付	有	上	—	無	無	付1A			1		TK43
	2 小山古墳群	大津市滋賀里2丁目	8号墳	付	有	上	無	無	無	付1A					TK43～TK209
8	1 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	1号墳	付	有	上	—	無	無	付1A	1		1	1	TK209
	2 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	3号墳	付	無	上	有	無	無	付2A	1		1	1	TK10～TK43
	3 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	4号墳	付	無	上	有	無	無	付2A	1		1	2	
	4 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	6号墳	付	有	上	無	無	無	付1A	1		1		TK43～TK209
	5 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	7号墳	付	有	上	—	無	無	付1A					TK43～TK209
	6 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	10号墳	付	有	上	無	無	無	付1A					TK209
	7 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	12号墳	付	有	上	無	無	無	付1A			1		TK209
	8 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	15号墳	無	無	横	無	無	無	無2B					TK209
	9 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	16号墳	付	有	上	無	無	無	付1B	1		1	1	TK209
	10 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	20号墳	付	有	上	無	無	無	付1A	1		1	1	TK209
	11 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	22号墳	付	有	上	無	無	無	付1A	1		1	1	TK209
	12 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	23号墳	付	有	上	無	無	無	付1A	1				TK43～TK209
	13 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	24号墳	付	無	無	無	無	無	付2D	1		1	1	TK43
	14 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	26号墳	付	無	無	無	無	無	付2D	1		1	1	TK43～TK209
	15 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	32号墳	付	有	上	無	無	無	付1A			1		TK209
	16 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	33号墳	付	無	無	無	無	無	付2D	1				TK10
	17 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	B2号墳	曲	無	無	無	有	曲D	1			1		
	18 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	B3号墳	付	有	上	有	無	無	付1A	1		1	1	
	19 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	C2号墳	付	無	無	無	無	無	付2D					
	20 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	C6号墳	付	無	下	無	無	無	付2C		1	1	1	
	21 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	D4号墳	無	無	無	無	無	無	無2D	1			1	
	22 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	D8号墳	無	無	無	無	無	無	無2D	1		1	1	
	23 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	D11号墳	付	無	無	無	無	無	付2D	1		1	1	
	24 太鼓塚古墳群	大津市滋賀里1丁目他	T2号墳	無	無	無	無	無	無	無2D	1		1	1	
9	1 熊ヶ谷古墳群	大津市滋賀里1丁目他	(個人蔵)	付	有	上	無	無	無	付1A					
10	1 福王子古墳群	大津市南滋賀2丁目	2号墳	付	無	無	無	無	無	付2D	1		1	1	TK43～TK209
	2 福王子古墳群	大津市南滋賀2丁目	19号墳	付	無	無	無	無	無	付2D	1		1	1	
11	1 大谷南古墳群	大津市滋賀里3丁目他	8号墳	付	無	無	無	無	無	付2D	1				
	2 大谷南古墳群	大津市滋賀里3丁目他	15号墳	付	無	無	無	無	無	付2D					
12	1 大通寺古墳群	大津市滋賀里2丁目他	C-1号墳	曲	無	下	無	有	曲C		1		1		MT15～TK10
	2 大通寺古墳群	大津市滋賀里2丁目他	C-2号墳	付	有	無	無	無	無	付1D	1				TK10
	3 大通寺古墳群	大津市滋賀里2丁目他	15号墳	付	無	無	無	無	無	付2D	1				TK217
	4 大通寺古墳群	大津市滋賀里2丁目他	43号墳	付	有	—	—	無	—	付1-					TK217

*吉水2010・2011をもとに、田中2011を追加して作成。

**—: 有無を確認できないもの。

*カマA: クの字口縁品、カマB: 羽釜。

は、付庇型と同様の庇を曲庇型に貼付した、両者の複合形態ともいうべき例がみとめられたので、付+曲庇型を追加して設定することにした。

以下、類型にもとづいて、旧郡ごとに様相を整理していく。なお、記述順は、出土事例を確認していない伊香郡・浅井郡・愛知郡・甲賀郡をのぞき、琵琶湖南西部の志賀郡から反時計まわりですめる。さらに、文中で遺跡名のあとに括弧でしめた番号は表2に対応している。

志賀郡 7遺跡49点が出土し、出土遺跡数・出土破片数ともに各郡のなかでもっとも卓越する。そのほとんどは、志賀古墳群が位置する大友・錦部郷域の大津市穴太遺跡・滋賀里遺跡・南滋賀遺跡といった渡来系集団の居住が想定される集落からの出土事例である。破片資料がおおいものの、庇形態を判別できる事例は付庇型に限定され、なかでも外

面突帯を有する破片が目につく。代表例として、ほぼ全形の判明する穴太遺跡例（志賀4-15）をあげる。その形態は、志賀古墳群で出土したミニチュアカマド形土器器付1A類とほぼ同形といってよいもので、ミニチュアカマド形土器の祖型の一つとみて大過ない。これに南滋賀遺跡溝1出土事例（志賀5-9～11）がTK209～TK217型式とされる点も考慮すると、時期を限定できる事例がほとんどないものの、当該地域のカマド形土器の存続時期は志賀古墳群の造営時期と確実に重複することがわかる。さらに、穴太遺跡GA区第2遺構面礎石建ち建物2では、礎石建ち建物の基壇面に付庇型のカマド形土器底部が据えおかれた状態で出土した（志賀4-14）。建物に確実にともなう事例である。時期は6世紀末～7世紀初頃とされる。

一方、志賀古墳群の位置する大友郷・錦部郷以外の郡内



図2 集落遺跡等出土カマド形土器の主要事例

近江地域のカマド形土器（辻川哲朗）

表2 力マド形土器一覧

近江地域のカマド形土器（辻川哲朗）

諸地域では出土例がほとんどない。そのなかで、錦部郷に北接する真野郷域の大津市真野遺跡で付庇型（志賀6）の出土をみたことは注目される。

栗太郡 出土事例として7遺跡16点を確認できた。志賀郡・野洲郡につぐ出土数である。庇形態を確認できた事例は付庇型が主体をしめるとともに、2例の付+曲型が出土している。所属時期を確認できる例はすくないけれども、以下の2例は、ある程度時期を推測できる事例である。大津市近江国府跡・菅池遺跡例溝1（栗太7）では、7世紀中頃の須恵器・土師器等とともに付庇型の破片が出土した。また、草津市横土井遺跡（栗太2）では、7世紀前半頃の方墳の周壕内から付+曲型が出土した。ほぼ同形態の付+曲型は栗東市岡遺跡（栗太4）からも出土している。また、西海道遺跡（栗太3）では溝から付庇型の破片が複数出土し、古墳時代後期頃とされる。なかには、確実に外面突帯を有する例（栗太3-1-1）がふくまれる。栗東市高野遺跡（栗太6）では、土坑から付庇型が出土した。伴出した須恵器杯蓋はTK43～TK209型式である。

野洲郡 7遺跡15点の出土事例を確認した。志賀郡につぐ出土遺跡数・出土破片数である。庇形態を確認できた事例は付庇型にかぎられる。守山市阿比留遺跡（野洲1）では、包含層から付庇型2個体が出土した。包含層からはTK47～TK209型式の須恵器等が出土しており、カマド形土器もその時期幅でとらえられる。また、守山市吉身北遺跡（野洲2）では堅穴建物SH14から付庇型が出土している。若干の土師器が伴出するものの、詳細な時期を決しがたく、古墳時代後期とするにとどまる。野洲市夕日ヶ丘北遺跡（野洲7）では、流路から付庇型が出土した。本遺跡は鏡山窯址群内に位置する遺跡で、須恵器生産関連集落の可能性がある。

蒲生郡 2遺跡11点が出土している。遺跡はいずれも郡西部の湖岸沿いに位置する。近江八幡市奥島館遺跡溝SD1（蒲生1）からは、7世紀末頃の土器にともなって付庇型の庇片をふくむ複数の破片が出土し、なかには外面突帯を有するものがある。近隣の近江八幡市島遺跡（蒲生2）でも7世紀末～8世紀前半頃の土器にともなって破片2点が出土している。細片で全体の形状は不詳であるものの、外面突帯をもつ破片をふくむので、付庇型の可能性がたかい。

神崎郡 東近江市斗西遺跡から破片6点が報告されるのみである。このうち3次調査SD1から出土した破片5点（神崎1-1～5）はいずれも細片であり、カマド形土器か不安がのこる。4次調査SD4例（神崎1-6）は底部と目され、付庇型となる可能性がある。時期は6世紀後半頃という。

犬上郡 2遺跡2例点を確認した。そのうち、彦根市肥田城遺跡溝S49例（犬上1）は、庇を欠失するため、形状が不明である。本例は外面突帯を有するものの、外面突帯が体部なかほど一把手付近にめぐる他例とことなり、焚口上端よりも上位に外面突帯がめぐる点が特徴である。伴出土器の様相から、時期は8世紀後半～9世紀頃とされる。

坂田郡 5遺跡21点の出土事例がある。出土遺跡の分布から郡北部と南部に大別できる。

郡南端の彦根市六反田遺跡T6流路（坂田5）からは、6世紀後半～8世紀前半頃の多量の土器とともに破片2点が出土し、そのうちの1点は付庇型であった。のこり1点も外面突帯を有しており、付庇型である可能性がたかい。

一方、郡北半部では、長浜平野に展開する諸遺跡から出土する。とくに、長浜市柿田遺跡では堅穴建物や古墳周壕等から9点（坂田2-1～9）が出土し、そのうちの庇形態が判明する3点はすべて曲庇型であった。これらは、古墳周壕例（柿田西区1号墳：坂田1-6～9）の伴出土器はTK47型式で、堅穴建物例（第9住居址：坂田2-2）が6世紀後半とされる。ちなみに、第9住居址ならびに第1住居址（坂田2-1）では羽釜鍔部片も出土しており、カマド形土器にともなう可能性がたかい。また、長浜市大塚遺跡では、包含層から完形の曲庇型が出土した（坂田3-1）ほか、5点の掛口部等の破片が出土している（坂田3-2～6）。掛け口部片のなかには内面突帯を有する例がある。内面突帯は曲庇型のみに確認される属性なので、この破片も曲庇型である可能性がたかい。残念なことに、いずれも包含層からの出土のため、正確な時期を決しがたい。長浜市横山城遺跡（坂田4）では、包含層から付庇型の破片が複数出土している。包含層からは6世紀末～7世紀前半頃の土器が出土し、カマド形土器の時期を示唆する。出土土器に窯道具や焼成失敗品がふくまれるので、須恵器生産関連集落と目される。また、長浜市長浜城遺跡（坂田1）では、正確な時期を決しがたい資料であるものの、平行タタキ・同心円紋当て具痕をのこす須恵質焼成の付庇型の破片1点が出土しており、須恵器生産との関連をしめす。

高島郡 2遺跡2点の出土事例がある。高島市弘川遺跡（高島1）では堅穴建物から付庇型が出土した。伴出土器からTK209～TK217型式と想定できる。また、高島市下五反田遺跡（高島2）では8世紀前半頃とされる堅穴建物から付庇型が出土した。

小 結 以上の結果をまとめると、つぎのとおりである。

【時期】 現時点で、最古例は柿田西地区1号墳周壕出土の曲庇型で、伴出土器はTK47型式である。曲庇型は5世紀末以降6世紀後半頃まで存続していたようである。付庇型はそれ以降に出現し、TK209～TK217型式の例がおおく、7世紀をとおして存続し、肥田城遺跡例のように、一部は8世紀後半～9世紀頃までもちいられている。また、2例を確認した付+曲庇型は7世紀～8世紀前半頃である⁽³⁾。

【分布】 まず、カマド形土器は当該期の集落等で普遍的に出土するわけではなく、出土遺跡はかぎられている点を確認しておきたい。そのうえで、その空間的分布には、つぎのように明確な偏在性がある。出土遺跡数・破片数とともに志賀郡－志賀古墳群の位置する大友郷・錦部郷に集中する。それに野洲郡・栗太郡がつづく。さらに、坂田郡－その北

半部でまとまって出土する。それ他の諸郡では、数遺跡・数点の出土にとどまるか、もしくは出土がみとめられない。

さらに、遺跡の立地についてもふれておきたい。奥嶋館遺跡（蒲生1）・島遺跡（蒲生2）のように、内湖間連絡水路に面して位置する例や、周辺に港湾施設が想定できる六反田遺跡（坂田5）・野洲市西河原遺跡群（吉地薬師堂遺跡・光相寺遺跡：野洲4）・長浜城遺跡（坂田1）等がある。

また、近江国府跡・菅池遺跡（栗太7）・岡遺跡（栗太4）は、同時代もしくはその後に官衙が設置され、官道に近接した立地といえる例である。

【形態】形態面でも、空間的な偏在性がみとめられた。全体的な傾向として付庇型が主体をしめる。注目すべきは、曲庇型が坂田郡一それも柿田遺跡・大塚遺跡に集中する点である。また、付+曲庇型の分布は2例とも栗太郡である。

4. カマド形土器からみた志賀古墳群造営集団（表3）

前章までの内容をふまえて、志賀古墳群から出土したミニチュアカマド形土器と、それ以外の集落等遺跡から出土したカマド形土器とを比較してみよう。

志賀郡のカマド形土器と志賀古墳群の造営集団 まず、志賀郡の状況を整理すると、以下の2点にまとめられる。

①志賀郡におけるカマド形土器は、志賀古墳群が展開した大友郷・錦部郷にあり、大壁建物や礎石建ち建物等の渡来系要素を濃厚に有し、かつ存続時期も志賀古墳群の造営時期と重複する諸集落一穴太遺跡・南滋賀遺跡・滋賀里遺跡から集中的に出土している。

②それらの遺跡から出土したカマド形土器は、志賀古墳群出土ミニチュアカマド形土器と同様に付庇型が主体をしめ、志賀古墳群出土例とほぼ同形で、それらの祖型（モデル）となる例も確認できた。

さきにしめしたとおり、ミニチュア品には祖型（モデル）があつたはずであり、ミニチュアカマド形土器を使用（副葬）していた人々は実生活においても同形態の実用品を使用していたという前提にたてば、上記の2点は、志賀郡一大友郷・錦部郷域の集落でカマド形土器を使用していた人々が志賀古墳群の造営集団（志賀漢人）であったことをしめし、従来の認識を裏づけることができた。

志賀郡以外のカマド形土器と志賀古墳群の造営集団 志賀郡以外の諸郡においても、志賀古墳群の造営時期と重複する時期のカマド形土器が集落遺跡等から出土していることが判明した。その大半は、志賀古墳群出土ミニチュアカマド形土器や、志賀郡の集落遺跡出土カマド形土器とおなじく付庇型が主体をしめる。破片資料がおおく、全形を把握しうる事例にとぼしいため、志賀古墳群出土ミニチュアカマド形土器と同形態の事例をしめすことはむずかしい。そのなかで、西海道遺跡他例（栗太3-1・2）が志賀古墳群出土ミニチュアカマド形土器付1A類と同形態であることは看

過できない。ここから志賀郡に居住し志賀古墳群を造営していた集団と、同形態のカマド形土器を使用する習俗を有する集団が栗太郡内に居住していたとみて大過ないであろうし、かれらが志賀古墳群の造営集団（志賀漢人）にふくまれていた可能性もたかいと見なしうるからである。

ただし、この西海道遺跡例以外の事例については、付庇型であること、外面突帯を有する例があること等以上に志賀古墳群出土ミニチュアカマド形土器との共通性をあげることは現状でむずかしい。そこで視点をすこしかえたい。

参考にしたいのは、煙突形土製品とも称される円筒形土製品の分布である。この円筒形土製品は、徳網克己氏（徳網2005）等によって、韓半島の造付けカマドやオンドル等の排煙用煙突されたものである。用途をめぐって議論がつづいているものの、その系譜が韓半島南部地域にもとめられ、渡来系文物とみる点には格別な異論がない。

近江地域における分布をみると、現状で10遺跡43点の出土があり（表3）、なかでも志賀郡中部（穴太遺跡・南滋賀遺跡等）と野洲郡の西河原遺跡群周辺に出土事例が集中する。とくに、前者はカマド形土器の出土事例が比較的集中するエリアであり、カマド形土器の使用者が円筒形土器も使用していた可能性を示唆する。後者もまた、前者ほど集中度合ではないものの、カマド形土器の出土が確認されるエリアである。

以上から、カマド形土器にくわえて、円筒形土器からも、志賀古墳群の造営集団であり志賀郡中部の集落に居住していた渡来系集団と物質文化を共有した集団が西河原遺跡群周辺に居住していたことを想定でき、かれらも志賀古墳群の造営集団（志賀漢人）にふくまれていた可能性がたかい。

坂田郡のカマド形土器と志賀古墳群の造営集団 つぎに注目すべきは、坂田郡北部に曲庇型が集中する点である。曲庇型については、志賀古墳群でも少数の曲庇型のミニチュアカマド形土器が出土している一方で、現時点では志賀郡内の集落遺跡から曲庇型は出土していないのである。この現象をいかに解釈すればよいのだろうか。

解釈の一つは、志賀郡内の渡来系集団居住集落では、付庇型がおもに使用される一方で、少数ながら曲庇型を使用する集団も併存しており、後者の葬地が志賀古墳群中の曲庇型ミニチュアカマド形土器副葬墳であったというものである。この場合、志賀郡内の渡来系集団居住集落から曲庇型が将来的に出土することを仮定することになる。

もう一つの解釈は、志賀古墳群中の曲庇型ミニチュアカマド形土器と坂田郡北部の曲庇型カマド形土器使用集団との関係を積極的に評価するものである。つまり、志賀郡内の渡来系集団が使用していたカマド形土器は基本的に付庇型であったが、かたや坂田郡北部には曲庇型を使用する集団一おそらくは志賀漢人の一部が進出・居住しており、かれらが志賀古墳群へ帰葬された結果、志賀古墳群中に曲庇型ミニチュアカマド形土器副葬墳が少数のこされたとかん

表3 円筒形土器一覧

旧郡 遺跡 番号	資料	遺跡名	所在地	出土遺構		性格	報告 番号	残存部位	形態	時期	備考	典拠文献
				地区	遺構名							
志賀	1	穴太遺跡(南川原地区)	大津市下坂本町2丁目	大津市	SD9	溝	372	口	突帯・鋸 突帯	7世紀中頃		栗本2011
志賀	2	穴太遺跡(西大津八バス工事)	大津市唐崎3丁目	大津市	AP-3	表探	109	口・体			仲川他2000	
志賀	1	穴太遺跡(西大津八バス工事)	大津市唐崎3丁目	大津市	AP-4	表探	110	底・体			仲川他2000	
志賀	4	穴太遺跡(西大津八バス工事)	大津市唐崎3丁目	大津市	AP-5	表探	111	口・体			仲川他2000	
志賀	5	穴太遺跡(西大津八バス工事)	大津市唐崎3丁目	大津市	穴太瓦窯区		995	口	鋸		仲川他2001	
志賀	2	1 南志賀遺跡	大津市南滋賀3丁目	大津市	57-1地点	包含層	8	口	突帯	○	瓦質 林他1993	
志賀	3	1 坂本里坊遺跡	大津市坂本1~6丁目	大津市	第5遺構面上層第5層		103	口・体	突帯	○	小野2015	
犬上	1	1 桂原内湖遺跡	彦根市松原町	彦根市	第2調査区	包含層	568	口			小島他2011	
犬上	2	2 桂原内湖遺跡	彦根市松原町	彦根市	第2調査区	包含層	569	口			小島他2011	
野洲	1	1 川原田遺跡	守山市川原町	守山市	第2区	SD-2	溝	351	口・体・口	鋸	烟本1989	
野洲	2	1 小堀遺跡	野洲市小堀	野洲町	第1トレンチ	SD-02	溝	図3	底	○	7世紀初頭	杉本1987
野洲	3	1 光相寺遺跡	野洲市吉田3丁目	中主町	上層包含層	31	口	鋸			7世紀初頭	徳網他2001
野洲	1	1 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	335	口			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	2	2 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	336	口			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	3	3 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	337	口	突帯		7世紀初頭	徳網他1990
野洲	4	4 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	338	口			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	5	5 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	339	底			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	6	6 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	340	底			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	7	7 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	341	口			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	8	8 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	342	口			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	9	9 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	343	底～体			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	10	10 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	344	底			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	11	11 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	345	突帯			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	12	12 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	346	突帯			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	13	13 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	347	突帯			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	14	14 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	348	突帯			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	15	15 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	349	突帯			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	16	16 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	北部暗灰色系粘質土層	350	突帯			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	17	17 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	A区		351	体			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	18	18 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	南部暗灰色系粘質土層	352	体?			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	19	19 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	暗灰色系粘質土層1	657	口			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	20	20 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	暗灰色系粘質土層1	658	口			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	21	21 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	暗灰色系粘質土層1	659	口			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	22	22 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	暗灰色系粘質土層1	660	口	突帯		7世紀初頭	徳網他1990
野洲	23	23 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	暗灰色系粘質土層1	661	口	突帯		7世紀初頭	徳網他1990
野洲	24	24 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	暗灰色系粘質土層1	662	口・体			7世紀初頭	徳網他1990
野洲	25	25 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	B区	暗灰色系粘質土層1	663	体		○	7世紀初頭	徳網他1990
野洲	26	26 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	第3遺構面	SD5301	溝	43	底・体		8世紀初頭～中頃	西山他2006
野洲	27	27 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	第3遺構面	SD5301	溝	44	底・体		8世紀初頭～中頃	西山他2006
野洲	28	28 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	第3遺構面	「柱跡の掘り下げ」	45	底・体			8世紀初頭～中頃	西山他2006
野洲	29	29 西河原森 / 内遺跡(1・2次)	野洲市西河原	中主町	第3遺構面	流路1017	223	口	突帯		6世紀末～7世紀初	辻川他2007
甲賀	5	1 夕日丘北遺跡	野洲市大槻原	野洲町	SH061	堅穴建物	2-395	ほぼ完形	○	6世紀後半(前IV期)		辻川他2005
甲賀	1	1 稲遺跡(2次調査)	甲賀市水口町植	水口町								細川他2005

がえるわけである。この場合、カマド形土器の時期からみて、志賀漢人の坂田郡北部への進出・居住は、すくなくとも6世紀前半頃には遡上することになる。

どちらが妥当なのか、現時点では確言しがたい。しかし、ここでは、志賀古墳群の被葬者の一部と共にカマド形土器を使用していた集団が想定され、かれらが志賀漢人の一部と解釈しうる余地が生じる点を強調しておきたい。

5. おわりに

前章までの検討結果を要約し、まとめにかえたい。

- ①志賀古墳群出土ミニチュアカマド形土器と、志賀郡中部の渡来系集団居住が想定される集落遺跡出土カマド形土器とのあいだには形態的類似点があることにくわえて、前者の祖型と目される同形態の実用品がみとめられた。よって、志賀郡中部に居住する渡来系集団は、使用するカマド形土器を祖型としてミニチュア品を製作し、かれらの葬地である志賀古墳群に副葬したとかんがえた。
 - ②文献史料から志賀漢人の進出・居住が想定されていた志賀郡以外の各郡においても、志賀古墳群出土ミニチュアカマド形土器や、志賀郡中部の渡来系集落出土カマド形土器と形態的に類似した例がみとめられたほか、一部には同形態品も確認され、カマド形土器を使用する習俗を共有する点で、志賀郡中部に居住していた志賀漢人と共通する集団が当該地域に居住していたことがわかった。その時期は志賀古墳群の造営時期と重複しており、かれらが志賀古墳群へ帰葬されていた可能性が見いだされた。
 - ③文献史料から志賀漢人の居住が想定される坂田郡では、とくに北半部の集落遺跡で集中して曲庇型が出土する。集落周辺に顕著な後期群集墳が形成されていないこと、志賀古墳群内には少数ながらも曲庇型ミニチュアカマド形土器の副葬例がみとめられることから、坂田郡北半部に進出・居住した志賀漢人が志賀古墳群に帰葬された可能性を指摘した。
 - ④志賀郡以外の諸郡におけるカマド形土器の時期からみて、志賀漢人の近江各地への進出・居住時期は、大橋氏が想定した6世紀後半～7世紀前半には達成されていること、さらに坂田郡の事例等からみて一部は6世紀前半に遡上する可能性があるという見とおしをえた。
- 今回、多くの課題を論じのこしたことは承知している。のこされた諸課題については、稿をあらためて検討することを期して、ひとまず本稿をおえることにしたい。
- [付記] 本稿作成にあたり、堀真人氏との議論をとおして、貴重な示唆をえた。とくにしるして、感謝を申しあげたい。

註

- (1) 志賀古墳群は、大津北郊の古墳群や比叡山東麓古墳群（吉水2008）などと呼称されることがある。本稿では、花田勝広氏（花田1993）にしたがい、「志賀古墳群」をもちいる。

- (2) 従来のミニチュアカマド形土器分類案では、属性として法量が重視されている。法量の変化が時間的変化を反映するとみなされたからである。しかし、本稿の目的はミニチュアカマド形土器じたいの編年ではなく、法量のことなる実用品との比較検討にあるので、分類上の属性から法量はひとまず除外した。
- (3) 付十曲庇型は、製作技法の点で曲庇型と類似するので、曲庇型が付庇型の影響下に変容した可能性をかんがえている。その場合、曲庇型の派生形態とみることになる。この点をふくめ、カマド形土器の製作技法については別稿で詳論したい。

文献（著者名・機関名50音順、刊行年順）

- *滋賀県教育委員会→県教委、滋賀県文化財保護協会→県協会
- *○○市（町）教育委員会→○○市（町）教委
- 青山 均(1994)『一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う大谷遺跡発掘調査報告書』大津市教委
- 青山 均・田中久雄(1989)『一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う穴太遺跡（弥生町地区）発掘調査報告書』大津市教委
- 青山 均・福田 敬(1992)『一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う上高砂遺跡発掘調査報告書』大津市教委
- 雨森智美(2009)『1989年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』栗東市教委・財団法人栗東市文化体育振興事業団
- 稻田孝司(1978)「忌の竈と王権」『考古学研究』25-2、考古学研究会
- 岩崎 茂(1986)『吉身北遺跡発掘調査報告書』守山市教委
- 植田文雄(1993)『能登川町埋蔵文化財調査報告書第31集 斗西遺跡（3次調査）』能登川町教委
- 植田文雄(1995)「第1章 斗西遺跡（4次調査）」『能登川町埋蔵文化財調査報告書第35集』能登川町教委
- 大崎哲人(1988)「大津市北郊の後期古墳の再考」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要』2、滋賀県埋蔵文化財センター
- 大橋信弥(1995)「近江における渡来系氏族の研究—志賀漢人を中心として—」『青丘学術論叢』第6集
- 大橋信弥・谷口 徹・大橋美和子(1982)『吉身中遺跡発掘調査報告書』県教委・県協会
- 小野 充(2015)「II 坂本里坊遺跡」『埋蔵文化財発掘調査集報VI』大津市教委
- 栗本政志(1993)「第4章 滋賀里遺跡」『埋蔵文化財調査集報III』大津市教委
- 栗本政志(2011)『穴太遺跡（南川原地区）発掘調査報告書』大津市教委
- 小島孝修・瀬口眞司・中村健二・辻川哲朗・大沼芳幸・濱修・神保忠宏(2011)『松原内湖遺跡II』県教委・県協会
- 小島孝修・辻川哲朗(2017)『長浜城遺跡 第272次調査』長浜市教委・県協会
- 小島睦夫(1996)「IV 阿比留遺跡（第1次）」『守山市文化財調査報告書第59冊』守山市教委
- 小林裕季(2011)『南滋賀遺跡発掘調査報告書III』大津市教委
- 坂本正裕・池寄陽一(1999)『墓立遺跡 柿田遺跡 正蓮寺遺跡発

- 掘調査報告書（第1冊）』長浜市教委
佐竹章吾(1988)「4. 奥鳴館遺跡」『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書XVII』近江八幡市教委
重田 勉(2016)『横山城遺跡 朝日遺跡』県教委・県協会
清水ひかる・宮本長二郎・中川正人(2004)『下五反田遺跡』県教委・県協会
杉原咲子(1997)『中兵庫遺跡』県教委・県協会
杉本源造(1987)「第1章 小堤遺跡」『昭和61年度野洲町内遺跡発掘調査概要』野洲町教委
田中久雄(1992)『一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う太鼓塚遺跡発掘調査報告書』大津市教委
田中久雄(2011)「第1章 大通寺43号墳発掘調査報告」『埋蔵文化財発掘調査集報V』大津市教委
田中久雄(2013)『近江国府跡・菅池遺跡発掘調査報告書』大津市教委
谷口智樹・大橋信弥・中川正人(1985)『横土井（觀音寺）遺跡発掘調査報告書』県教委・草津市教委・県協会
辻川哲朗(2016A)『島遺跡』県教委・県協会
辻川哲朗(2016B)「古代における土器製作技術の一侧面—長浜市横山城遺跡出土カマド形土器を中心にして—」『紀要』29、県協会
辻川哲朗・木戸雅寿・重田 勉(2007)『夕日ヶ丘北遺跡・大篠原西遺跡』県教委・県協会
徳網克己(2005)「カマドに伴う円筒形土製品について」『龍谷大学考古学論集I』
徳網克己(2000A)「第3章 光明寺遺跡第44次発掘調査概要」『平成10年度中主町内遺跡発掘調査年報』中主町教委
徳網克己(2000B)「第4章 比江遺跡第2次発掘調査概要」『平成10年度中主町内遺跡発掘調査年報』中主町教委
徳網克己・國分政子・山尾幸久(1990)『西河原森ノ内遺跡第1・2次発掘調査報告書I』中主町教委
仲川 靖(1989)『柿田遺跡発掘調査報告書』県教委・県協会
仲川 靖・林 博通・田路正幸(1997)『一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書II』県教委・県協会
仲川 靖・林 博通(2000)『一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書III』県教委・県協会
仲川 靖・林 博通・中川正人・中條利一郎・松本嘉代・畠 大介(2001)『一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書IV』県教委・県協会
西中久典(2013A)『南滋賀遺跡発掘調査報告書IV』大津市教委
西中久典(2013B)『南滋賀遺跡発掘調査報告書V』大津市教委
西山佳宏・徳網克己・濱田宏明(2006)『野洲市内遺跡発掘調査集報V』野洲市教委
畠本政美(1989)『川原田遺跡発掘調査報告書』守山市教委
花田勝弘(1993)「渡来人の集落と墓域」『考古学研究』39-4、考古学研究会
花田勝弘(2000)「大壁建物集落と渡来人（上・下）」『古代文化』
- 52-5・7、財團法人古代學協會
林 博通・畠中英二(1993)「(1) 57-1地点発掘調査概要」『南滋賀遺跡』県教委・県協会
平井寿一・近藤 広・雨森智美・佐伯英樹・木村元浩(1990)『岡遺跡発掘調査報告書』栗東町教委・財團法人栗東町文化体育振興事業団
平井美典(1987)『琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴う栗東町高野遺跡発掘調査報告書』県教委・県協会
福田 敬・青山 均・岡山仁美(2014)『都市計画道路3・4・21号道路改良工事に伴う真野廃寺発掘調査報告書I』大津市教委
藤居 朗(2013)『西海道遺跡・笠寺廃寺・南笠古墳群発掘調査報告書』草津市教委
細川修平・田中咲子・畠中英二・大道和人・二ノ宮早緒里(2005)『植遺跡』県教委・県協会
堀 真人(2013)『六反田遺跡I』県教委・県協会
堀 真人・重岡 卓(1999)『木曽遺跡III』県教委・県協会
堀 真人・内田保之・辻川哲朗・細川修平(2010)『肥田城遺跡肥田西遺跡 鶴田遺跡』県教委・県協会
松浦俊和(1984)「ミニチュア炊飯具土器論」『史想』20、京都教育大学考古学研究会
松浦俊和(2002)「大津北郊の後期群集墳とミニチュア炊飯具形土器一群集墳の支群構成と、その性格について—」『田辺昭三先生古稀記念論文集』眞陽社
丸山雄二・丸山文子(1995)『大塚遺跡』長浜市教委
水野正好(1969)「滋賀郡所住の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告書 第四冊』県教委
山口順子・兼康保明(1981)「第4章 高島郡今津町弘川遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VIII-3』県教委・県協会
山田謙吾(1990)『吉地薬師堂遺跡、光相寺遺跡発掘調査報告書』中主町教委
吉水真彦(2005)『穴太遺跡（下大門・東生水地区）発掘調査報告書』大津市教委
吉水真彦(2008)「比叡山東麓古墳群のミニチュア炊飯具」『古代學研究』180、古代學研究會
吉水真彦(2010)「資料ミニチュア炊飯具集成」『埋蔵文化財調査集報IV』大津市教委
吉水真彦(2011)「資料ミニチュア炊飯具集成II」『埋蔵文化財発掘調査集報V』大津市教委

(つじかわ てつろう：調査課副主幹)

【編集後記】

当協会は、〈文化財をとおして地域に力強く貢献していくこと〉を組織の使命に掲げ、その基盤となる調査・研究能力を向上させ、その蓄積を形にしていくための場として『紀要』を位置づけてきました。今回、ここに30個目の結晶をお届けいたします。

本号では、縄文・古墳に関わる諸問題のほか、古代の地域の開発、瓦器の基礎的研究、戦国の城の位置づけ、さらには将棋や鉄道にまつわる歴史、人と森との関係史などが検討され、調査の過程で生まれた多様な課題に取り組む職員・関係者の姿を反映させるものとなりました。

地域と関係機関の協力の下に実施できた調査成果を適正に活かすため、更なる研鑽に励んで参ります。今後も皆様のご批判とご教導をあらためてお願ひいたします。 (S. S)

紀要 第30号

刊行年月日：平成29年（2017）3月31日

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 / (fax) 077-543-1525

(e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

印刷・製本：三星商事印刷株式会社